

◆ 今週のコメント

- ・ インフルエンザ感染の報告は、ありません。
なお、国立感染症研究所からの全国におけるインフルエンザウイルス検出情報によると、4月16日現在の報告数は、第10～14週の5週間にAH1pdmが121件、AH3型が11件、B型が37件となっています。
- ・ 腸管出血性大腸菌感染症の報告が2例あり、本年初めての報告です。推定感染経路は、経口感染(バーベキュー)と不明です。
- ・ A型肝炎の本市での報告は、平成21年10月以降ありませんが、京都府(市外)では、第11週に1例あります。また、全国の今週の報告数は16例で、平成20年以降の週別報告数では、先週(18例)に次いで多くなっています。推定感染経路別では、カキ等貝類の喫食による感染の報告が複数あります。また、劇症肝炎の事例が4月9日現在で2例報告されており、引き続き注意が必要です。
- ・ 感染性胃腸炎の定点当たり報告数は、6.24(256例)で、第13週(5.07)に比べて増加しています。年齢では、1歳が20.7%(53例)と最も多く、0～4歳で67.2%(172例)を占めています。

◆ 今週のトピックス: <流行性耳下腺炎>

流行性耳下腺炎の定点当たり報告数は、1.32(54例)で、本年で最も多くなっています。
詳細はトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数報告の感染症

- ・ 三類: 腸管出血性大腸菌感染症(O26 VT1, O157 VT型不明) 2例【1月以降の累積報告数 2例】
- ・ 四類: レジオネラ症(肺炎型) 1例【1月以降の累積報告数 2例】
- ・ 五類: アメーバ赤痢(腸管アメーバ症) 1例【1月以降の累積報告数 6例】

定点報告の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0.00	0
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	6.24	256
	② 流行性耳下腺炎	1.32	54
	③ 水痘	1.22	50
	④ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.59	24
	⑤ 突発性発しん	0.49	20
眼科	流行性角結膜炎	0.30	3

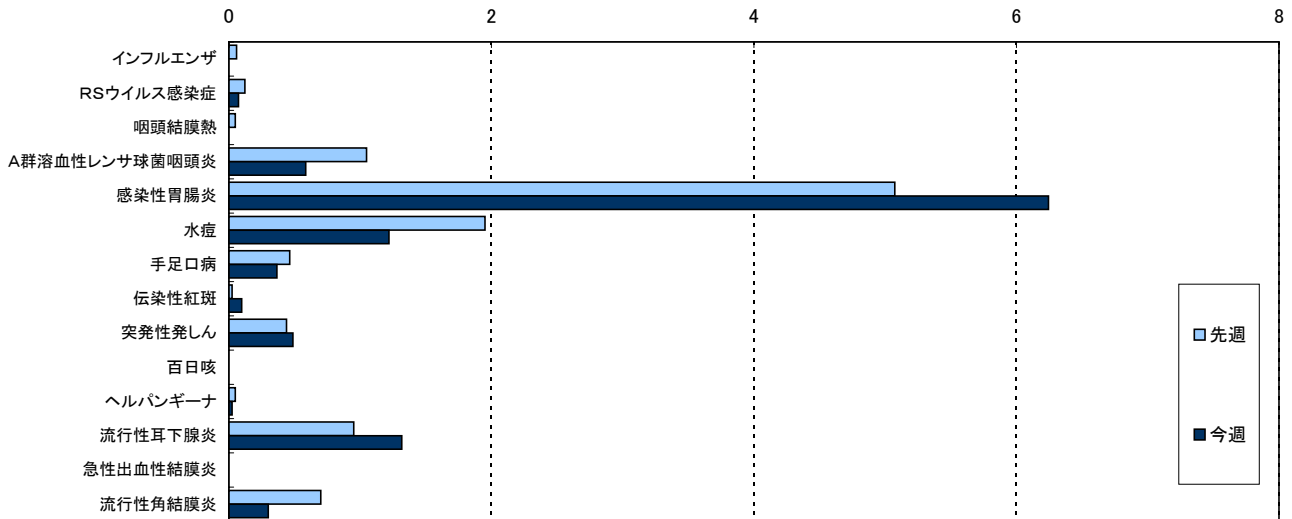
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <流行性耳下腺炎>

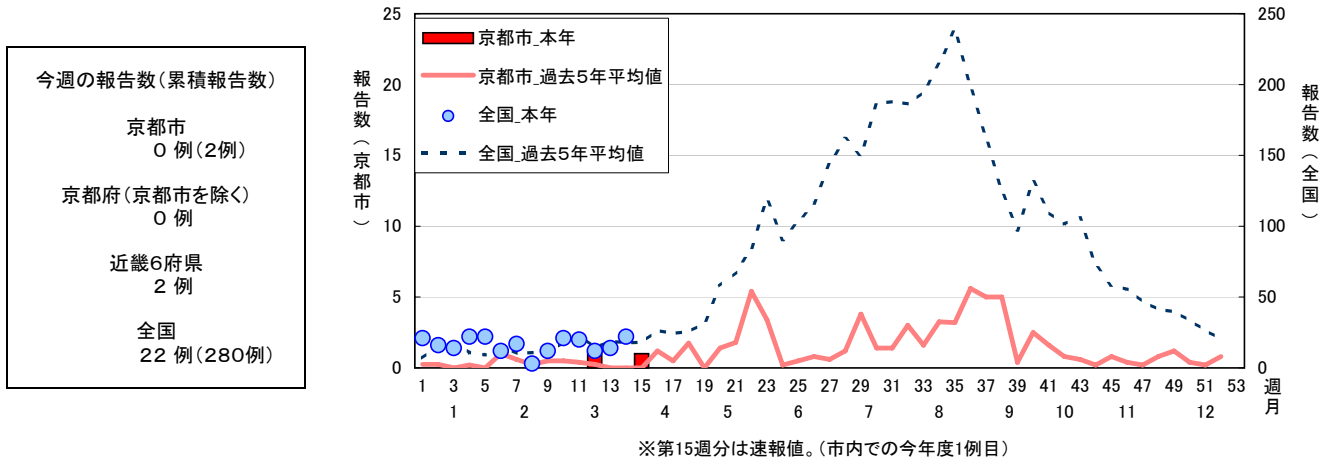
(注) 京都市のデータは、平成22年4月15日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在の保健所での集計で、患者の住所を示すものではありません。

◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第14週)と先週(第13週)の定点当たり報告数の比較



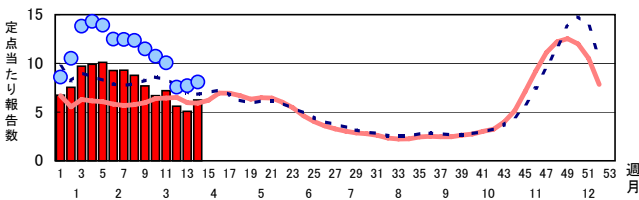
2 腸管出血性大腸菌感染症(三類感染症)の推移



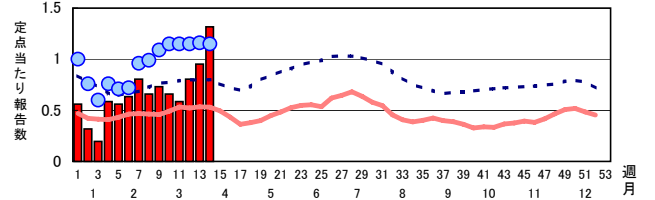
3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>

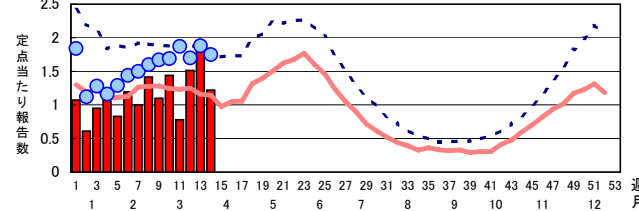
1 感染性胃腸炎



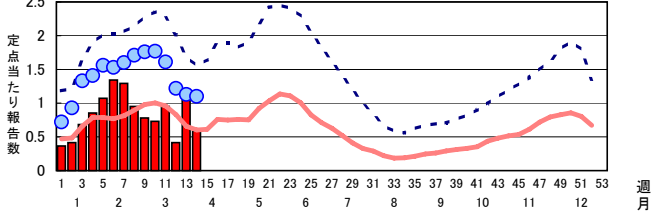
2 流行性耳下腺炎



3 水痘

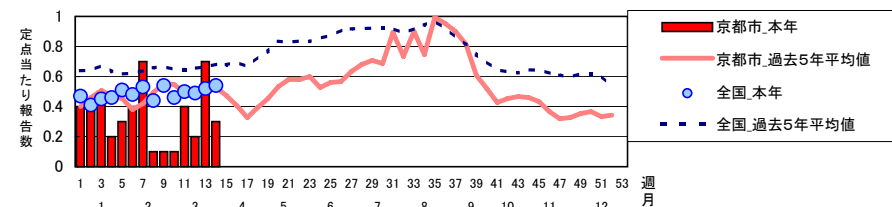


4 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎



<眼科定点>

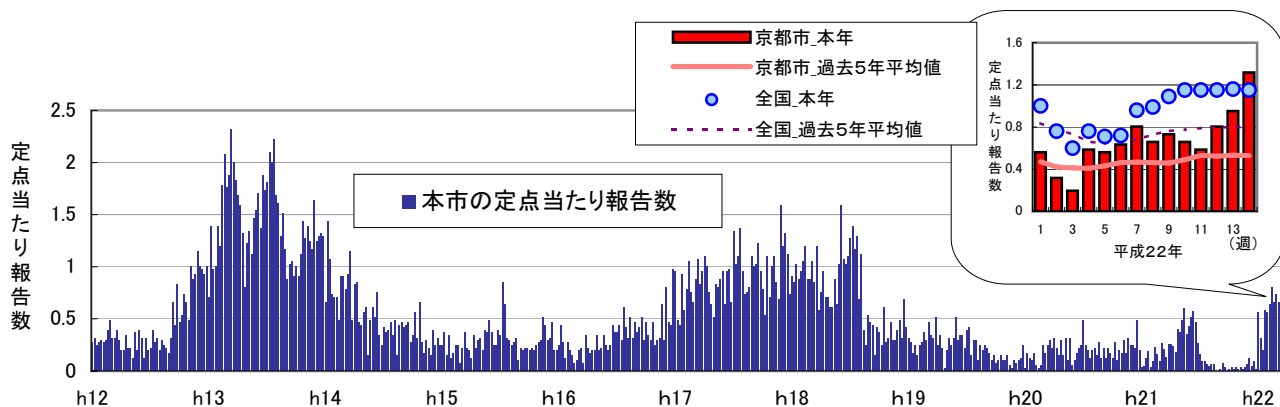
流行性角結膜炎



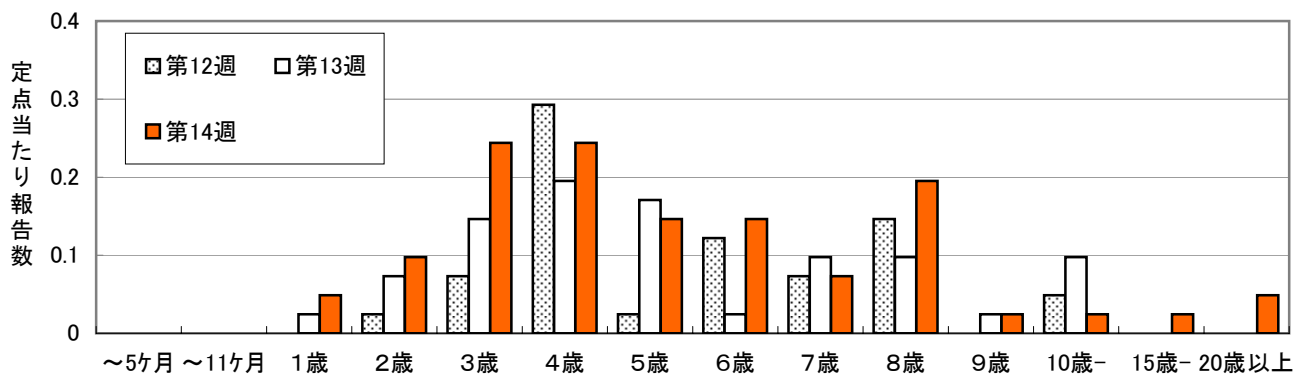
第14週(4月5日～4月11日)トピックス: <流行性耳下腺炎>

流行性耳下腺炎の定点当たり報告数は、1.32(54例)で、本年度で最も多くなっています。
 過去10年間(平成12年から平成21年)の推移をみると、数年おきに報告数は多くなっています。平成19年以降は、定点当たり報告数が少ない状態が続いていましたが、本年度の第4週以降、過去5年平均値を上回る状態が続いており、特に、第12週以降は、報告数が増加していますので、今後の動向に注意してください。
 年齢階級別にみると、「3歳」及び「4歳」が最も多く、次いで「8歳」の順となっています。
 平成21年以降の本市及び京都府、近畿、全国の推移をみると、特に、京都市及び京都府では、平成22年以降、報告数が増加しています。

本市の過去10年間(平成12年～平成21年)及び本年の定点当たり報告数の推移



年齢階級別定点当たり報告数の推移



本市及び京都府、近畿、全国の定点当たり報告数の推移(平成21年及び本年)

